

## 実験古生物学へのいざない

井 尻 正 二

最近の生物工学や移植外科の成果には、目を見張るものがある。そして、古生物学者のおおくは、この成果を対岸の火事と感じたり、高嶺の花だとあきらめて、ただ傍観しているようである。

しかし、私が50年まえに提称した「実験古生物学」では、このような分野の研究をどのように見ていたであろうか。すなわち、小著『古生物学論』（現在の『科学論』、国民文庫、大月書店、1977年、上巻106ページ）では、つぎのように述べている。

「現在科学における条件的な方法は、動物学、とくに畜産学における品種改良に、具体的な進路の一つがみいだされる。家畜のあるもの一たとえば、牛・馬など一は自然の環境条件のもとでは、たちまちその生存権をうしない、あるいは死滅してしまう必然性があるが、人為的な環境条件のもとでは、逆に、その偶然的な因子を発展させ、野生動物よりも人間社会という環境条件に適応して、生存と繁栄をつづけている事実をみる。著者は、このような傾向をおしすすめる生物学の進路こそ、条件的な方法を完成する方向であると信じている。

しかし、家畜は純粋科学（純粋生物学）のわくの外だからと主張し、この種の生物学の方法を、たえず応用科学の方法である、といてかえりみない生物学者は、まず、なにをか自然といい、なにをか条件と定義するかを、純粋な科学的な見地からも、ふかく反省する必要があるであろう。現在の畜産学が、まだ単なる畜産学にとどまるわけは、さきに指摘した作物学とおなじように、方法論に困窮しているからであり、それにもまして、科学の方法と実践とが分離をきたしているからではないだろうか。畜産学にとどまらず、すべての生物学、いなすべての科学は、将来、この条件的な方法をもちいるようになるであろう、という確信は、著者の重要な科学的信条の一つである」。

このように、実験古生物学は現在の生物工学や移植外科といった研究分野を、すでにその射程におさめていたのである。

たしかに戦後は、古生物学者も現生生物学の研究手法や研究手段をとりいれ、現生生物をも包含した研究をおこなうようになってきた。しかし、あれから50年(半世紀)、私自身、研究条件を失ったこともあって、正しい意味の実験古生物学は何一つ成果をえないでいるのが実情である。

その反面、歴史的観点、すなわち地球の歴史・生物の歴史・社会の歴史的観点を欠いた生物工学や移植外科は、やがて奇形化し、社会に害を流す危険性を十分にはらんでいく。

こんな時代に直面したとき、古生物学者はもっと自信と情熱をもって、実験古生物学にとりくんでいかなければならないと思う。さもなければ、やがて古生物学は生物学の一分枝、否、生物学の博物館の一隅に収納され、その独自性を失ってしまうかもしれないのである。

とはいえ、げに「ローマは一日にしてならず」である。したがって、古生物学者は観察のための実験、たとえば化石の断面をつくったり、化石の化学分析をしたりする実験や、現生生物をつかったモデル実験でも、飼育実験でも、なんでもよいから、現生生物をも対象にとりこみ、現代の生物学の手法を積極的にとり入れた実験的研究をさかんにしなくてはならない、と信じる。

これは、実験古生物学の半面、すなわちその方法の側面にはふれない手段（技術）の側面にかぎっての研究である。しかし、それでもよいから、まず実験古生物学の技術的側面を積極的に開発していきたいものである。そして、それによって実験古生物学の方法的側面もよみがえってくるものと信じられるからである。

今から50年まえ、私もまだ青年であった。私はその昔を思いうかべながら、この一文をしたためている。若い古生物学者の奮起を心からうながすものである。